



戦争体験

柏原市 T・H(78歳)

わたしは昭和11年、大阪市大正区で生まれました。生まれた時にはすでに戦争は始まっていたが、まだ当時は穏やかで、世の中がどんな風になっているのか知らずにいました。あんなに優しく子煩悩だった父が突然いなくなり、南方の方へ行ったとの返事。どこへ何しにいったのかなど、母に聞けるような雰囲気でないことは、なんとなく判りました。その頃、灯火管制、竹やり訓練、防火訓練なども行われたしました。小さな子達も原っぱへ行ってコークス拾い等を手伝っていました。生活に必要なあらゆる物が不足していました。月に1度か2度開く大衆食堂で、おかゆというより重湯に団子が入っていて米粒は数えるほどの少ない物でも行列が出来て何時間も並んで買いました。昭和18年国民学校入学前、叔母たちが、店に早々から並んで鉛筆、ノート、クレヨン、画用紙とか消しゴム、色鉛筆など、学用品は不自由しないで済むほど揃えてくれました。せっかく苦勞して買いそろえてくれた文房具も使わずに焼けてしまいました。なにもかもナイナイづくしで、母はいかにして生活をしていこうかと大変だったと思われます。

昭和19年、疎開という言葉を度々聞きました。3、6年生まで、田舎に親類のある者はそこに縁故疎開を、親類のない者は集団疎開といって地方の方へ疎開しました。集団疎開の方は食糧難や家族恋しさ、ふるさと恋しさで苦しい思いをされたようでした。他にも荷物疎開というのもありました。使用しない衣服とか寝具などを縁故疎開して行きました。

昭和17年、20年の終戦まで、学徒動員といって当時の中学生(男子)や女学生たちが勉学のかたわら、と言ってもほとんど勉強のほうは中止状態で、作業をして行きました。戦況が深刻化するにつれ、昭和19年に学徒勤労令が公布され、中学生以上の生徒は軍関係の工場で作業をしました。防空壕掘りとか、弾薬を作ったり、紙風船爆弾を作ったり、落下傘を縫ったりし

たとも聞きました。

昭和20年3月13日の深夜、大阪大空襲がありました。B29が20機から30機くらいの編隊を組んで絨毯を敷いたように次から次へと焼夷弾を落とし、空から火が雨あられと降ってきました。空襲警報発令で防空壕に入ったけれど、すぐに入口にも火が見えたので防空壕を飛び出しました。どこをどう走っていたのか、何時間さまよっていたのかわかりません。あたり一面が火の壁で、まるで閉じ込められた状態です。どこへ逃げてまわっても火の壁に追いかけられどおしでした。熱いとか怖いとも思いませんでした。感覚とか感情とかは、もうマヒしていったのでしょうか。ただただ火から逃れようと必死だったので、母の手を離さないよう無我夢中に握り締めて、ついて行きました。逃げ回っている間に、誰からともなく北恩加島国民学校へ逃げろということ聞き、学校へ行きました。行けば大講堂もすでに満杯で、大勢の負傷者が横たわっていたり、うめき声あげたりの修羅場でした。

夜も明け出し、父の妹である叔母の家を探しに行きました。幸いなことに叔母の家は焼けずにすみ、そのまましばらく叔母の家で厄介になりました。3、4日が過ぎて、自分たちの家の焼け跡を見に行きましたが、何一つ残っておらず、まだブスブスと燃えて煙が所々で立っていましたし、水道管も壊れて水が流れ出ていました。茶碗や皿、湯のみなどの瀬戸物類は粉々に、ガラス製品は熱で溶けてアメ状になり地面にくっついていました。

その後母の実家の三重県に帰ることになるのですが、大正区から近鉄上六まで徒歩で帰りました。人通りも途絶え、まったくの焼け野原です。大正区、西区、南区、港区なども大きな被害を受けました。電柱が黒こげになり、電線が切れてぶら下がっているのは、所々あちこちで見受けられ、焼け残ったものの屋根は落ち、壁は抜け、です。防空壕の入口付近で、戦鬨帽をかぶり足にはゲートルを巻いた男性や、防空頭巾をかぶり、今でいう作業衣の様な格好をなさった女性の、黒こげで炭のようになった姿を見たり、まだ新しいムシロを被せられてはいるのですが手足がのぞいていたり、周囲をテントで囲ってあったりした死体も目にしま

コークス
石炭を乾留(蒸し焼き)してつくられる燃料のこと。

学徒勤労令
第二次世界大戦末期、深刻な労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食料生産に動員されたこと。

焼夷弾
敵の建造物や陣地などを焼き払うために使用する、爆弾や砲弾。中に入っている焼夷剤が燃焼することで、対象物を火災に追い込むのが目的。木造の日本家屋を効率よく焼き払うために使われた。

ゲートル
歩行を楽にするため、ズボンの裾を押さえ込み、足首から膝まで覆うものこと。



作業衣
元は寺院の僧侶(修行僧)が作業着として着用していた衣服で、作業と呼ばれる日常の労働作業(薪割り、掃除、畑仕事など)を行う際に作業着として着ていたとされる。



した。

国鉄湊町の駅では列車が標的になったのか、橋の上で市電は電線が切れて窓ガラスもな
く、ただの箱状になり、高架が直径1〜2メートルほど抜け落ちて下の列車が丸見えになっ
ていました。やっこの思いで近鉄上六駅に着き、まわりを見渡したら、建物らしい建物はほ
んどが焼けて、大丸百貨店の建物だけが見えました。

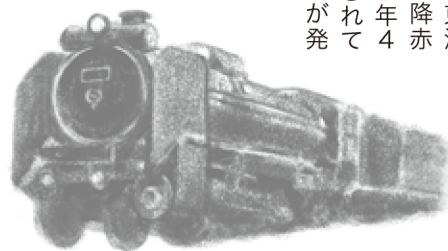
昭和20年という年は、本当に変動の年でした。白い服は空からの標的にされやすいから着
ないほうがいいと聞かされたり、ある時の下校途中に、友と峠道の頂上に差し掛かった時、
急に爆音がして慌てて池の堤防の溝に身を伏せたりしていたことを覚えています。その頃
アジア救済連盟からの物資を1、2回受けたことがあります、とても食べられたものでは
ありませんでした。いくら食糧不足でもあれはひどい物でした。何時間炊いても柔らかくな
らないジャガイモや腐ってジクジクになった悪臭のするサツマイモです。テントは
レインコートに、毛布も洗い直して仕立て直しをして手を加えながら利用しました。

終戦をむかえ、教科書を墨で塗りつぶしたり、式の度に聞かされていた教育勅語とか両
陛下の写真が飾られていた奉安殿などもなくなり、学校も学科もだいぶんと変わりました。
進学したくてもそれは叶わず、就職するにも片親というだけで差別を受け、私の人生は一体
なんなんだったのだろうと思います。犠牲になるのは女、子どもです。もう私のような経験
は、誰にもさせたくはない。戦争はどんなことがあってもしないでください。

いま、政治に携わっている方達へ。未来ある子供を犠牲にしないでください。子ども達は
皆、幸せに暮らす権利があるのです。どうか子ども達の幸せを守ってやってください。

国鉄

政府が100%出資して国家が保有ま
たは経営する鉄道事業。1949年6月
1日に発足したが、東海
道新幹線の開業以降赤
字に伴い、1987年4
月1日に民営化されて
JRグループ7社が発
足した。



奉安殿

第二次大戦中まで、日本の各学校で天皇
と皇后の写真（御真影）と教育勅語を納
めていた建物。